弥生集落史の地平(1)

――地域社会への接近をめざして――

石黒立人

1. 環濠集落と囲郭集落

環濠集落と囲郭集落 弥生時代の集落を景観的にみれば、平野部においては点在する微高地上における建物(竪穴建物・高床建物など)の集合ということになる。その場合、建物どうしが近接して密に集まっている集落と、建物どうしが間隔をおいてまばらになっている集落の二つを基本的な姿として考えることができる。

しかし、この二つの姿はひとつの地域で同時期に並んで存在することはほとんどなく、時期的に交互に出現する。同じ地理的位置にある集落(いちおうここでは、これが系譜的に連続したムラであるか否かを問わないことにしておく)でも、時を経るなかで建物が密集したりまばらになったりしている。そして、密集する時にはよく、集落のまわりに溝がめぐらされる。

集落のまわりをめぐる溝は、大きなものでは幅 4~5 m、深さ 2 m以上という、到底ひとが飛び越えられないような規模を有する例があり、これなど防御の役割が十分果たせるものとして、ふつうは「溝」を「濠(壕)」と呼び換えて、濠がとりまく集落という意味で「環濠集落」と呼ばれている。しかし、なかには容易に飛び越えられるほど溝が小規模であったり、防御とは異なった役割が考えられる溝もあり、その場合にはとくに区別をつけないで「環溝集落」と呼ばれることもある。ただ、どちらにしても、溝を中心とした把握に限定されていることに変わりはない。

私は、溝以外にも栅などで囲まれた例のあることを考慮して「囲郭集落」と呼んでいる。すでに 小野忠煕氏は「囲郭村落」と呼んでいるが、「囲郭 集落」もそれに近い用語である。

高地性集落と囲事集落 瀬戸内地方や近畿地方に分布する高地性集落と呼ばれる丘陵上などの高所に立地する遺跡には、通常の生活が営まれる居住区を中心に面的に展開する継続的な集落と、一時的に出現し特異な立地を示す集落とがある。通常、戦いに関係すると考えられているのは後者である。しかし、一部を除いて後者には環濠などの構築物が伴わないのが普通で、そうした傾向は近畿地方より瀬戸内地方に顕著なようだ。環濠をめぐらす高地性集落の場合には、立地差を無視すれば低地の囲事集落とほとんど変わらない内容を備えるものがあり、これなどはあえて高地性集落と呼ぶ必要がないものといえる。

この点で、ただ高いところにある集落と、高い所にありかつ囲乳集落としての構造を有するものを同列に置くことはできないだろう。問題の焦点は、高地性集落が一般的な集落のあり方であれば、それをあえて「高地性」と呼ぶ必要はないということ、そしてどうしても「高地性」と呼ばなければならないとすれば、それは低地の集落とセットで存在して初めて「高地性」と呼べるのだということ。高地に対しての低地という、このトポグラフィックな対関係が前提されて初めて高地性と言えるのだという点が、往々にして忘れられているようだ(2)。

2. 囲郭集落の系譜と出現時期

さて、囲乳集落は水田稲作の開始とともにではなく、少し時間をおいて成立したようだ。最近ではとくに縄文時代の稲作論議が活発だが、遅くとも縄文時代晩期から弥生時代初期にかけて(あるいはそれ以前に)水田稲作が北部九州を中心に普及したことが確実であるとしても、環濠集落の出現についてはそれより時期的に下り、遠賀川式(板付式) 土器の成立を大きくは遡らないと考えられる。

それは、大陸に系譜がたどれるものとして、時代の画期に、その当のものとして典型的に出現したものであり、社会の発展段階に即応して内在的要因を前提に出現したものとは考えられない。造営主体が何であれ、文化的には移植されたものと考えることが現状では妥当なところであろう(3)。

西日本における大陸系要素としての囲乳集落は、 弥生時代前期のうちには伊勢湾地方にまで分布を 拡大する。愛知県豊橋市白石遺跡で発見された囲 郭の溝は、現在までのところ弥生時代前期におい ては太平洋岸で最も東に位置する。

東日本の類似例 最近、東日本の縄文時代晩期の集落の中に棚囲いの例が存在することがわかってきた。また北海道では縄文時代中期の環濠集落? (静川遺跡他:環濠内部から発見された住居跡が少数であり、通常言われる集落とは様相が異なる) さえも発見されている。西日本で囲郭集落が出現する遥か以前に北の地域で、稲作と全く無関係に環濠による区画が出現しているとすれば、囲郭集落の性格を絞り込むこともなかなか容易ではないものとなる。

さて、そうなると弥生時代前期の東日本における棚囲い集落として注目されている秋田県地蔵田

B遺跡の位置づけはどのようになるのであろうか。 これまで地蔵田 B遺跡については、遠賀川系土器 が出土していることや墓域と居住域が分離してい ることなどから西日本系の囲郭集落の影響下に成 立した棚囲い集落であると判断される場合もあっ たが、果してそのような理解でよいのであろうか。

今のところ、縄文時代の環濠集落は以後に続かないようだし、本州では未発見なので一時的な類例と考えられるのでいちおう除外できるとしても、
棚囲い例に関しては西日本の弥生時代初期と近接した時期であること、環濠集落も濠だけでなく、
土塁・柵などが複合した構築物によって囲まれていると考えられるのであれば、柵のみが分離して用いられることも考えられないでもない。

囲乳集落の現在までの調査例をみる限りでは、 西に環濠集落、東に栅囲い集落という分布差を認 めることは可能である。だが、その背後に系譜差 が想定できるのかどうか、つまり栅囲い集落にも 西とは別系譜の大陸系要素を認められるのかどう かについては、大陸を含めた多くの資料の具体的 検討が必要であろう。

伊勢湾周辺の事例 弥生時代前期に始まった 囲郭集落という集落形態は弥生時代を通して断続 する。以下に伊勢湾地方の事例を若干整理してお こう。

弥生時代前期の囲郭集落には、低地に位置して 1重の溝によって囲まれるものと台地の縁辺に位 置して2重(多重)の溝で囲まれるものとがある が、どちらも溝は全周せず弧状部分と自然流路ま たは台地の縁辺がつくる区画が居住域の範囲にな っている。全周形態は近畿地方まで分布するにと どまり、伊勢湾地方では発見されていない。

後者に属す名古屋市高蔵遺跡は、居住域の拡大 にあわせて溝が2条づつ平行して掘削されている。 同じ形態の四日市市大谷遺跡・永井遺跡が外縁で も径が100mに満たないのに比べて高蔵遺跡のそれは外縁ではないのに100mほどあり、しかも遺跡付近に水田適地が存在しないにもかかわらず他に比して遺跡範囲の広い点で注目される。前者の名古屋市月縄手遺跡や春日井市松河戸遺跡は、溝が全周しないで弧状に部分的に囲むだけで、居住域の拡張も認められない。土器編年上の年代幅は認められるが、基本的に単発の集落であろう。

中期には全周するだけでなく⁽⁴⁾、柵や逆茂木を配する朝日遺跡(名古屋市西区・西春日井郡清洲町・同春日町・同新川町)や、溝の配置を部分的に複雑にする甚目寺町阿弥陀寺遺跡のような例も出現する。環濠に構造物を組み合わせて複雑化する様相が伺える。

後期には集落自体の小規模分散化のなかで囲郭 集落の数も急増することになるが、平面形態は中 期例に比べて単純となる。なかには、名古屋市三 王山遺跡、知多市大廻間遺跡(丘尾切断型)など のように、海の見える(海に近い)丘陵上に立地 するものがある。これらは瀬戸内海に面する「高 地性集落」と景観的な類似性を強く示す例である が、一般的ではない⁽⁵⁾。

この時期の環濠には、名古屋市瑞穂遺跡・同見晴台遺跡のように、幅5m、深さ4mという大規模なもの(まさに"濠")があり、しかも特徴的なV字断面を呈している。どちらも台地上に位置する点で、地形的・地質的な特質であるかもしれないが、その掘削土量が膨大であることは決して無視できないだろう⁽⁶⁾。

3. 区画された集落

集落の中を区画すること 集落のまわりを溝で囲むこと自体は弥生時代でも普通のことだが、 集落の中を溝で区切る例はそれほど多くはない。 これまで明らかになっている例を探してみても、 伊勢湾地方では朝日遺跡以外には知られていない。 他の地域でも長野県松原遺跡、奈良県唐古遺跡、 同岩室・平等坊遺跡の他には余り知られていない。 関東地方でも多くの環濠集落が調査されているに もかかわらず、そうした可能性があるのは折本西 原遺跡だけのようだ。

むろん集落の中が区画されているかどうかは、 遺跡を広範囲に調査しなければ明らかにならない ことではあるが、他地域を含めてこれまで判明し ている遺跡をみる限りでは、時期的には弥生時代 中期以降でしかも大集落である場合に集落内を複 数の溝が走る傾向があるように思える。

朝日遺跡では弥生時代中期に囲郭集落を営み、 環濠によって囲まれると考えられている北居住域 以外の地区にも大溝が掘削されている。南居住域 では北東から南西方向に向かって幅3~4m、深 さ1.5mほどの溝が少なくとも2条検出されており、 中期中ごろまでは溝としての形状をとどめている。 北居住域の環濠も一部の区間はいちどきに埋め立 てられたりしているが、その他の部分はなかなか 埋まりきることなく溝状の窪地として残っていた ことが確認されており、弥生時代中期を通して地 表を区切る溝によって集落がいくつかの居住区に 区分されていた可能性が高い。そうした居住区の 性格については、たとえば朝日遺跡の玉作工房が 溝で囲まれた地区で検出されていることを参考に すれば、やはり他と区別されるような一定の役割 を担った単位の人々や生活の単位をなす人々それ ぞれが占地したと考えるのが妥当だと思う。

奈良県唐古遺跡では、伊勢湾地方東岸北部を主要な分布圏とする内傾口縁土器が特定の地区から多数出土している。もともと近畿圏であまり出土しない遺物であり、唐古遺跡に集中すること自体が地理的関係によるものである可能性が高いのであるが、実態はどうであれ特定の集落の特定地区が特定の地方につながっているということ(何ら

かの社会的・経済的関係の存在)をうかがわしめている点で注目される。

区画の集合としての集落、または<都市>

一つの集落が複数の単位に分かれることは、別に区画が無くとも竪穴建物の分布からある程度推定できることである。しかし、そのように識別された単位と、ここで述べたような区画施設によって区切られた地区に分居する単位とでは、当然性格は異なることになろう。普通の集落が区画を持たないでいくつかの単位に分かれる場合、それはただ建物相互の単純な距離関係であって、それ以上に遮るものは無いのである。それに対して単位の間がなんらかの構築物で区切られるということは、実際の距離関係以上に強く、深く区別されていることになると考えられる。

区画にもとずく居住区の形成については、区画施設を伴う複数の居住区があらかじめ秩序だって設けられているところに人々が移り住んだのか、自らが居住する場所のまわりに区画を設けて他から画したことによって居住区が形成され、後にそれが連結していったのか、さらにその他にいくつかのパターンが考えられるのかなど、想像はいくらでも膨らむが、いずれにしてもそのどれかに確定できるにわけではない。

ただ、朝日遺跡の場合では、もともと広範囲に 広がった集落が区画によって秩序づけられること と、墓域の確定および超大形方形周溝墓の出現が 連動していると考えられることから、人々が勝手 気ままに居住区を連結させていったのではなく、 全体を統制する意志が働いていちどきにそういう 形になったのだと考える方が理解し易いだろう。 そして、もし居住区が整然と並ぶのであればそれ はまさに〈都市〉といった観を呈することになる のだが。

地域を代表するような中心的な大集落が、その

外部との区画だけではなく、その内部さえもいく つかの単位に区切られていることは、そうした区 別を必要とする異質な部分が集まることによって 大集落が構成されているということを暗示してい る。

こうした区画単位それぞれの規模は弥生時代前期の単純集落とほぼ同等である場合が多い。もっとも、弥生時代前期から中期にかけては集落の規模自体が大きくなっているようで、上に挙げた単位も前期と同じ水準の質を備えたものではあっても量的に規模が大きくなっている可能性はある。仮にそうであるとしても、それにしても本来なら一つの集落を形成するだけの単位が、単独で集落を形成せず、複数集まって大きな集落を形作る点は、まさに集落の質に関わる点として重視してよいだろう。

特定の大集落を構成する単位の規模、とくにその量的側面については、大集落の多くが長期継続 集落であることから同時期の建物数がよくわから ないために、把握が難しい。それでも、いちおう 内部に区画をもたない集落を参考にして考えてみ ることはできる。

内部で廃棄物処理をしている弥生時代前期の囲 郭集落の平均的規模を2,500㎡で4~6棟(神戸市 大開遺跡を参考)として、内部に廃棄物処理空間 をもたない大集落がこれより密集しているとすれ ば、2,500㎡に10棟前後の棟数が想定できるであろ うか。また、竪穴建物1棟が30~50㎡の床面積と して、屋根を地面にふきおろす部分を含めて、1 棟あたり150~200㎡が必要であるとして、朝日遺 跡にこれを当てはめるならば、弥生時代中期は10 万㎡に600~500棟となる。このうち、中心居住区 は5万㎡で、300~250棟となる。ただし、中心居 住区に広場や大形建物が存在すれば、当然のこと ながら棟数は少なくなる。 <都市>とは、そして農村とは 異質な部分からなるが決して排他的ではなく有機的に全体を形作る、そして機能的に分化し、かつ重層化(複雑化)した集落は、その凝集性・複雑性という点で、まさに<都市>の原型(原都市)を見せているのではなかろうか。

だが、朝日遺跡を始めとする大集落が整然とした街区を構成しない点をみて否定するむきもあるかもしれない。しかし、だからといって何故「都市」ではないといえよう。

どのようなものを「都市」とするかという考え 方が、「都城」出現以降の都市像、あるいは世界史 的な都市像に規定されているとするならば、その 立場で都城以前の都市がイメージできるわけがな いと、私は思う。

つまり、それは定義の問題にとらわれてしまっているといえる。定義は他の研究領域、分野から借用する場合には明確であるが、そもそも当の借用がなぜ可能であるのかは問われないことが多い。また、当該事象のいくつかを定義に相応するものとして抽出する場合でも、そこではすでに定義が前提されているのであり、トートロジーになる。自然科学的な定量化された定義なら別だが、われわれ考古学において個別の現象から抽象する場合には、しかも物質的なモノを対象にしない場合には、共通認識的な規定以上に即自的に規定することなどほとんど不可能であろう。

もともと語彙に限りがあるなかで、複雑な現象を整理し表象させるために用語を他にもとめることも仕方のないことであると考えるが、しかしその点とその語の明確な規定をすることを一度に行うことはできない。だからこそ、それは特定の現象を抽出し整理するためであって、ゆえに定義とは別の問題だと考えたいが・・・。

さて、朝日遺跡には玉作工房が存在し装身具類 の生産を行っていたことは確実である。また、骨 角器の生産も行っていた。そしてとりわけ朝日遺跡を特徴づけているのは膨大な貝層の形成である。 大規模な貝層の形成は決して農業的基盤の脆弱さを表示しているのではなく、海産物加工品の生産を長期にわたって行っていたことを示していると、私は考えている。ただし石器のうち、磨製石斧やサヌカイト製打製石器類については朝日遺跡における製品化を示す資料はけっして多くはない。その大部分は搬入されたものであって、これらについて直接生産を強調する必要はないと考える。

いずれにしても、こうした遺跡で出土する遺物 は内容豊富であり、しかも他の集落に比べて多く の品目の直接生産も行っている。複数の生産部門 を抱える必要があったわけだ。

内部が区画された集落とそうでない集落とでは、 集積、あるいは蓄積された情報の量だけでなく、 その質も異なる。朝日遺跡のように内容豊富な出 土遺物に彩られる遺跡がある一方で、集落の規模 は決して小さくはないが、めぼしい出土遺物が生 活用具や少量の生産用具に限られる遺跡もある。 たとえば朝日遺跡と近在する阿弥陀寺遺跡との対 照的な関係。両者は、複数の生産部門を有する大 集落と単一の生業に強く規制された通常の集落(農 耕集落)という集落関係の図式を典型的に示して いる。

すなわち、大集落の出現が、その必要とする食糧の確保をもあわせて要求する(食糧の安定的確保が大集落成立の前提ともいえるが)ために、分村を、つまり農村や漁村を成立させるのだと。

むろん、まず農村が成立し、それが大規模化したとするほうが、実はわかりやすい考え方である。ところがよく考えれば、それは集落の量的な側面への注目にすぎないのであり、現象としては集落規模の単なる変化の枠内にとどまっていることになる。そこから大集落の複雑性を導くことはできない。

だから、私はそのように考えるのではなく、<都市(的集落) > が最初から<都市(的集落) > として成立した可能性を、量的な問題ではなく質的な問題として、生産集落/消費集落という対比のなかで、個別的には廃棄物処理の方式を指標のひとつとして考えてみたいのである(7)。

おそらくこうした図式は弥生時代前期にも成り 立つだろう。さらに遡って、縄文時代においても 成り立つかもしれない。

4. 中心をもつ集落あるいは居館

集落における"核"の認知 佐賀県吉野ケ里 遺跡では、弥生時代後期に「外濠」と呼ばれる大 きく外まわりにめぐらされた濠に加えて、それよ り内側に小さくめぐらされる「内濠」が存在する ことによって、集落がトポグラフィックに同心円 的に、あるいは入れ子状と呼べるようなありかた で区分されている。これは同格の居住区が並存す るのとは異なり、それらとは区別された中心とな る居住区の存在を示すものとして注目される。

このような入れ子状に区画が設けられる例は、 中世後半以降の城郭変遷史の中で、環郭式といわれる様式、あるいは総構えといわれる様式と一部 類似する。それら城郭の中心には領主の居館が位 置することになるが、吉野ケ里遺跡では同様に首 長居館の存在が想定されている。

吉野ケ里遺跡で発見された中心を囲む溝の発見 例は、これまでのところ愛知県はおろか伊勢湾地 方においてさえ無い。けれども、弥生時代中期の 朝日遺跡が、複数に区切られた部分が単に等質的 に並存しているだけであるとは、超大形方形周溝 墓の存在をみると、到底そのようには考えられな い

朝日遺跡のように集落内を区切る溝が集落を構成する部分の存在を示しているにとどまらず、そ

れら単位が存在すると同時に中心の存在をも示し ているように私には思われる。

そして大集落が、

①単に大きくなったのではなく、周辺から人々を引き寄せる"力"(もちろん食料の安定供給が基礎条件として必須であることは言うまでもないが、居住条件として単にそれが沖積低地内の微高地という安定した自然環境であったというだけであったとしても)が内在するからこそ継続して大規模でいられる、

②自然成長的に大規模化するのではなく人為的 (計画的)に、ある意味で必然的に大規模化した と考えられる。

③廃棄物を個別分散的に無統制に内部処理する のではなく、一定の規制のもとで内部または外部 で一括処理する、

④その凝集性による建物の密集によって、失火 等による類焼に対する安定性を低下させるからそ れへの対処が必須となる、

⑤いくつかの部分に区分された集落として、それを統合するだけの力が働かなければ分解してしまうと考えられる、

など、大集落としての継続性を保つために多く の条件がクリアーされなければならないとするな ら、そこに全体を統制し方向づけるだけの意志を 想定し、それを中心(あるいは都市の中枢)と考 えることもできる。

かりに中心となる意志が集団の意志を超えない としても、まずもって集団としての意志を代表す る部分として異なる水準で存在しなければ、他を 排除するべく区画することも行われることはない だろう。

しかし、中心を囲む溝をもつ集落が把握できる かどうかはまず調査面積の広狭に左右される。通 常規模の発掘調査で判断材料を得ることは難しい からである。また、我々自身が保持する認識能力 の程度に左右される場合も往々にしてあるだろう。

中心、あるいは居館 ところで、弥生時代の 集落が大:小、複雑:単純、継続:断絶とは別に、 中心:周縁という関係で整理できる可能性につい てはどうであろうか。

ここで、中心を居館と呼び替えれば、現在までのところ古墳時代については居館の存在が確実視されている。また弥生時代後期についても北部九州では吉野ケ里遺跡を始めとして比恵遺跡など方形環濠例について居館の可能性が言われている。 東海地方でも静岡県伊場遺跡が居館である可能性が高い。だが、それ以前についてはどうであろうか。

そもそも、弥生時代の社会がいかなるものであったかについては、集落の形態学的な分析だけではなかなかわからない。大きい集落が小さな集落を衛星的に配していたのか、それともその逆に小さな集落がそれよりも大きな集落を衛星的に配していたのか、その判断を集落からのみ導くことは難しい。あるいは、小さな集落が機能分化を遂げていれば、それらを全体として組み上げる役割をもった集落が中心として存在することを仮定して、そうした集落を探すことができるのであろうか・・・・等。

弥生時代前期の集落を [複雑:単純] で区分することは難しい。[大:小] と [継続:断絶] の識別ができるのみである。このうち、[大] と [継続] が凝集性と安定性を示しているとするならば、伊勢湾地方では高蔵遺跡が該当する。

弥生時代中期には [大:小]、[継続:断絶] に [複雑:単純] を加えた識別が可能になる。そし て [複雑・大・継続] を揃えている集落は主要な 水系を単位とする範囲に1、2遺跡程度存在する。

弥生時代後期にはまた弥生時代前期のように[大: 小]と「継続: 断絶] が遺跡差の指標になり、「複 雑〕は影をひそめる。

現状では、弥生時代中期についてはすでに述べたように中心の認定がある程度可能なようである。それに対して、前期と後期は認定要件が不十分である。それでもいちおうの可能性を考えるならば次のようになろう。しかし、その場合にも当然同一地域単位に属する集落の比較検討が前提になり、地域を超えた普遍的な規準を設けることはできない。

伊勢湾周辺地方において弥生時代前期には立地 の特異性から高蔵遺跡に注目したい。中期は各水 系での基幹集落の抽出が必要であるが、尾張地方 では五条川水系に朝日遺跡、庄内川水系に西志賀 遺跡を、伊勢地方では安濃川水系の納所遺跡、鈴 鹿川水系の上箕田遺跡などを挙げることができる。 後期には遠江地方の伊場遺跡を最有力候補として 挙げることができる。

矢作川水系の中根山遺跡は他に類を見ない沖積地に面する丘陵上の遺跡である。低地の岡島遺跡に対する高所にある遺跡として、瀬戸内地方などにおける高地性集落とは別の意味をそこに与えることができるのではなかろうか。この点は三重県松阪市川原田B遺跡なども含めて、低地との比高が大きな集落の分布を、低地の集落とセットで押さえる必要がある。低地の集落を抜きにした論議は無意味である(8)。

こうした集落立地の高低という対比が可能であるとすれば、近畿地方の淀川水系で認められる高所の集落と低地の集落というあり方との関係が気になるところである。高所のムラと低地のムラという対関係が、「高城」と「水城」とは別に新しい様相、つまり<中心>と<周縁>という価値を有する様相を帯びることになる。「高い」から高いのか、そうではなく「高い」から低いのか、その逆は・・・・など。

このように中心の在り様については、弥生時代

前期と後期は集落群(地域)のある一点に中心があり、弥生時代中期は大集落に中心があると言えようか。あとは、こうした図式がどれだけ適応性を有するかどうかということだ。

5. 紛争への接近

見える戦いと見えない戦い 弥生時代に武力 を伴う紛争があったことは、おおかたの認めると ころであろう。佐原 眞氏が石鏃の大形化と高地 性集落の出現が連動していることを、香川県紫雲 出遺跡の報告において注意を促して以来、そうし た考え方が普及した。だから、弥生時代の武器形 を呈する道具の多くが武器とみなされるというこ とも、現在では当然のことのように考えられてい る。囲乳集落が防御に工夫を凝らした集落である という見方も、この延長にあることはいうまでも ない。しかし、高地性集落が、その全てが紛争に 関係してはいないように、囲郭集落もそのすべて が紛争発生に対処して防御を固めたと断言できる わけではない。反対に、囲郭集落の存在しない時 期に果して紛争が無かったと言えるのかどうかさ えも確定していないのが現状である。

伊勢湾地方に限定していうならば、確実に武力 紛争が考古学的な事象として現れるのは、紀元前 後の一時期だけである。 2世紀後半から 3世紀に かけての一時期にも武力紛争の発生が伺えないこ ともないが、前者のそれは、これまで私が各所で 言及してきたように、きわめて広域的であること、 その前後の地域文化の内容に大きな変化が生じて いることなどから、かなり深刻なものであったこ とが想定されるのである。だが、紛争が武力を伴 うものであったとして、その武力の基礎としての 軍事編成の内容について触れ得る資料が無いこと も事実である。

人類が戦いに対して親和的であったか非親和的

であったかについて確たる証拠はない。現在では 弥生時代が争乱の時代として強調され、そのため 縄文時代があたかも平和(牧歌的)な時代であっ たかのように思われているが、人間が集団生活を するなかで心理的な葛藤が生じ、それが外部化し て軋轢に転化することが、決して珍しいことでは なく、かえって通常の事態であることを考えるな ら、むしろそうした負荷を解消するための紛争の 発生は避け得ないことであったのではなかろうか。

したがって、問題は紛争の形態と内容ということになるが、弥生時代には恒常的に戦いがあったといえるのであろうか。とすれば、囲郭集落の間欠的出現はその戦いの規模に関係するということになるのだろうか。

つまり、戦闘の規模と社会的レベルが囲郭集落 の推移と形態を規定した。言い換えれば、単発的 な、小規模な、小範囲の戦いと継続的な、大規模 な、広範囲に及んだ戦いの、とくに時間的な長短 の差が、囲郭集落の存在形態を規定したというこ とか。

この点において囲乳集落は、弥生時代という外的に条件づけられた固有の時代に出現したという、その意味でまさに必要性において存在したものではあったが、単に集落形式として形式的に存在する場合と、特定の状況(乱)に対応して存在するという二つの局面が考えられるのである。そしてこの二つの局面は、列島規模においては時間的に平行し、かつ分布的にはズレを伴いながら存在した。すなわち、初期には跛行的に拡散し、その後には地域それぞれの社会的状況に対応して消長した。だから、地域社会のあり方と抜きにした一般論が意味をもたないことは明らかである。

戦いの変化 縄文時代に、一部の時期・地域 を除いて弥生時代のような囲乳集落は存在しない。 それに対して、弥生時代には囲乳集落が西日本を 中心に一般的に存在する。このことは、囲郭集落という形態が弥生時代になって出現したもの、言い換えれば文化的事項として出現したことを示している。ということは、紛争の形態・内容も文化的項目として新たに西日本にもたらされた可能性を示唆する。

この点で、弥生時代が農耕社会であり、故に戦争が始まったという考え方は、農耕社会一般が対立解決手段としての戦争を内在させていたということになり、問題が多い。近年の稲作問題の進展は、農耕と戦争をとりあえず分離できることを示しており、囲郭集落の出現も同様に農耕との関係が一義的ではないようだ。つまり、農耕一般ではなく、どの地域でいつの時代・時期に、そしてどこから、という限定が伴うのである。

戦争には内戦と外戦がある。後者を国家の成立 以後における国家間戦争、前者を同一社会内部に おける紛争が武力を伴い規模が拡大したものとす れば、日本列島の集団が世界史(中国史)に登場 するまでは、そして世界史に登場して以後も一定 の期間は基本的に内戦であったということになる。 しかし、仮に内戦であったとしても、その当事者 は、おそらくいくつかの水準に分かれていたであ ろう。また、倭人伝の記載にある「クニ」の存在 を認めるならば、弥生時代にはすでに外戦が始ま っていたということもできる。

以上の点については、次のように要約できよう。 縄文時代に囲郭集落はなく、弥生時代の西日本 にはほとんどの地域に囲郭集落が存在し、古墳時 代には特定の集落のみ囲郭集落に化する(通常の 集落とは距離を置いた首長居館の広範な展開)と いう推移は、対立が文化内容に現れない段階→対 立を解決する手段としての戦争が諸階層を問わず 個別に現実化する段階→対立の解決手段としての 戦争はあってもそれが特定の階層に限定され、あ るいは制度化していた段階、というように。(1995.1.5)

註

- (1) 本論はこれまで私が書き連ねてきた雑文の延長にあり、 内容的に重複している部分のあることも否定できない。し かし、今後の方向を個別集落史と地域史に向けるに際して、 いちおうの整理も無駄ではないと思い、以下に試みた。
- (2) こうした混乱の発生はその多くが、ある個別の現象を認識の出発点にして、その単純化によってモデルが作成(帰納) され、次にそのモデルが新たな出発点となって大多数の現象に適用(演繹) されるということへの基本的理解の欠如に起因している。

モデルが一般性を獲得するのは、モデル自体の説明能力によるというよりも、多くはモデルが現実対象の複雑性を 圧縮していることによっている。つまり、モデルの作成された背景が切り捨てられるか、あるいは忘れられることによってモデルの一般性が獲得されているのだということが、 再度忘れられていることによる。結局は、ある認識の空間 的背景の隠蔽である。

(3) 弥生文化における在来の要素・外来の要素・固有の要素という3区分では、外来要素であることは確実である。 その出現が遠賀川系土器成立を多少遡ったとしても、だから在来の要素であるということにはならない。それが縄文時代に大きく遡る場合についてもやはり大陸との関係が問題になるであろう。

さて本論では「移植」という穏やかな表現をとった。だが、文化が人間集団によって担われるものであることからすれば、移植されたのは固有の文化伝統を有する集団であるという方がよいのかもしれない。

- (4) 伊勢湾地方において濠の全周が連続的に確認された弥生時代中期の遺跡は実際には存在しない。現実には、大規模な遺跡ほど全周が確認される可能性は低下するといえる。 (5) ある地域の集団が新しい土地において集落を営もうとする場合に、同じ景観の地を選好する可能性はどうだろうか。後期の遺跡立地の特異性を考えるときに、在地における内在的な変化として考えるか、あるいは他地域の集団が流入した可能性を考える余地を残すかであるが、私は後者をとりたい。トポフィリア的な視点が可能かどうか気にかかる。
- (6) 丘陵や台地に立地する遺跡は沖積低地に立地する遺跡に比べて、濠が大規模である。しかし、沖積低地では地下水位の問題があり、幅に比べて深さの確保は難しい場合が多いのであろう。しかし、逆に濠底が湛水すれば視覚的な深さは無限になるから、視覚的な条件も加味する必要があるのかもしれない。水がないから「壕」であるとは、そういう条件に合致した遺跡に妥当するのであり、一般性を有するものではなかろう。

(7) こうした考え方においては当然のことながら「集落群からなる社会」が前提される。それを地域社会と言い換えてもよい。この意味で、〈都市(的集落)〉とは一般的な定義の問題ではなく、個別の集落群をいかに分類するかという点に関わるものと考えている。

(8) 再び言うが、低地に分布せず高所だけに集落が立地する場合には、それは環境の問題であり、社会的な問題とはならない。<高>と<低>があって初めて分類が可能になるのであり、そこで価値の高低を問うことが可能になる。

(9) それぞれの集落を点として、その空間的配置の内的関係を読み取るのが現状のセツルメントアーケオロジーとすれば、本論もその枠を完全に脱し切れていない。しかし、私はそれらの時間的に微分とも積分とも判断がつかない構成に対してだけでなく、遺跡の時間的な地点移動を認めること(それら地点を固有の集落史として包括すること)から地域社会を描き出すという方法にも、同様に違和感を覚える。

集落とは、果たしてそれほど単純でつかみ易いものなのであろうか。それらが複合している地域社会も、単に集落 群に過ぎないのであろうか。

そこにはまさに、加減を方法的基礎におく様式論と同様 の均質空間からなる世界が、パラレルに存在しているよう に、私には思える。あたかも当然であるかのように。

参考文献

小野忠煕 1969「集落と住居」『新版考古学講座4 原始文 化(上)』、雄山閣。

石野博信 1973「高城と水城」『古代学研究』68。

原口正三 1973『高槻市史』考古編。

森岡秀人 1986「高地性集落」『弥生文化の研究7 弥生集 落』、雄山閣。

石黒立人 1986「弥生時代尾張地方の囲郭集落について」『年 報 昭和60年度』、財団法人愛知県埋蔵文化 財センター。

武末純一 1990「北部九州の環溝集落」『乙益重隆先生古希 記念論文集 九州上代文化論集』。

石黒立人 1990「断章 弥生集落研究をめぐって」『長野県 考古学会誌』61・62。

下条信行 1991「弥生時代の玄海灘海人の動向-漁村の出現と役割」『横山浩一退官記念論文集』。

安藤広道 1991「弥生時代水田の立地と面積」『史学』6 2-1・2。

伊丹 徹 1992「弥生時代中期から後期の集落」『神奈川県 下における集落変遷の分析』、神奈川県立埋 蔵文化財センター。 石黒立人 1994「「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」を考える」 「孝古学フォーラム」 4。

補記 脱稿後、1月14日・15日の両日に佐賀県で開催された埋蔵文化財研究集会に参加する機会を得た。

弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の変化を多面 的に検証しようという意図で企画されたもので野心的であ り、それなりに有意義ではあったと思う。しかし、残念に 思えたのは、用語の規定・内容の問題が、一般的な問題に されていたことである。

「環濠集落」「首長居館」などの用語が、地域性を帯びないまま使用されていたことはある意味で仕方のないことかもしれないが、個々の遺跡のもつ個別の様相をはめ込むには決して十分ではないだろう。もう少し地域に即した類型化がなされる必要があったのではないかと思えた。

あとはやはり年代の判定、つまり広域的な並行関係の不確定さがいつもつきまとうのであるが、仮に年代をおくとしても、すぐさま列島規模でものを考えるにしては、地域を媒介する中間概念に対する配慮が、私を含めて十分整備されていないという感想をもった。

結局、どの水準で議論をするのかというところで、資料 集積の濃淡による齟齬が往々にして生じるということだけ にとどまらない、大規模なシンポジウムにつきまとう陥穽 なのかもしれない。

いずれにしても、こうしたシンポジウムに身軽に参加できた我々にとっては、その企画・運営に携われた関係者の方々に、ただ感謝の気持ちを捧げることができるのみである。 (1995. 1.16)

追記 阪神大震災は現代先進都市の弱点を明らかにした。 だが、こうした事態もけっして今に始まったことではなく、 過去から何回となく繰り返されてきたことでもある。その たびに過去の人々はそれを乗り越えてきた。だから現代の われわれがそれを乗り越えられないわけがない。

むろん、過去の人々すべてに未来があったわけではない。 かえって火山噴火による被害の方が突発的で避け得ない苛 烈さがあった。九州南部の縄文早期文化の壊滅はその最た るものであろう。

つまるところ、過去の人々が災害にどのように対処したのか、ということを我々がいかに問題にできるか、が問題なのだ。災害が自然であれ人為であれ、それを乗り越えることができた人々がいたからこその歴史であるとするならば、集落史、地域社会史もそうした観点から語られる必要がある。いままさにその時だ。 (1995. 3.13)